説教20210905ヤコブ1:17-27 マルコ7：31-37

「イエスのなさったこと」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

キリストのなさっとことは全て素晴らしい。このキリストの行いを称賛する人々の声は、時代を超えて今の私たちにも引き継がれています。全て素晴らしい、ここが人間の行いとは違う処です。私たち人間は、ごくまれにしか素晴らしいことを行うことが出来ません。たいがいは、間違ったことや、タイミングを外したことを行うことに終始しています。

　タイミングを外したこと、で思い出されるのは、コヘレトの言葉3章です。

何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。・・・神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。

何事にもなされる時があります。そのタイミングを知っているのは主なる神だけです。

生まれる時、死ぬ時・・・、泣く時、笑う時のタイミングを完全に知って、行うことが出来るのは主イエス様ただ一人なのです。

私なんかも、昔、乳児院という処で子供たちのお世話をしていた時に、よく子供から「尾崎パパ、そこ笑う処じゃないよ」といって叱られていたのを思い出します。

このコヘレトの言葉は、神の時を知らない私たちを憐れみ、ただ一人、神の業のタイミングを知り尽くしている主イエス様をほめたたえています。

　今日は敬老感謝の主日礼拝をお捧げしています。週報の本日の聖句に挙げました、歴代誌下34：30に記された様に、老いも若きも、この世のヨワイを同じくした者たちが、今ここに集められて、御言葉を聞くことができる、主なる神の時宜にかなった御業に感動します。今日は、老いも若きも心を一つにして主イエス様に感謝と賛美をささげていきたいと思います。

　さて、今日のマルコ福音書の聖書箇所はイエス様の御業の、時宜にかなった素晴らしさをほめたたえる内容でありますが、同時に私たち人間が常にタイミングを外してしまうマズさを知らしめる内容ともなっています。今日は先ずイエス様の素晴らしさをほめたたえつつ、その人間の残念な姿を見ていきたいと思います。

　イエス様が耳がきこえず舌の回らない人の耳を開き、話すことが出来るように舌のもつれを解いたことを目の当たりにした人々は、先ずイザヤ書３５章を思い起こしたことでしょう。そこには「そのとき、見えない人の目が開き／聞こえない人の耳が開く。」と記されています。人々はこのイザヤ書35章に記されている予言の出来事の実現として、イエス様の開けというエッファタの御業を見たのであります。イザヤ書35：10「主に贖われた人々は帰って来る。とこしえの喜びを先頭に立てて／喜び歌いつつシオンに帰り着く。喜びと楽しみが彼らを迎え／嘆きと悲しみは逃げ去る。」

つまり人々は、今の私たちも待ち望んでいる処の、最後の日の永遠の喜びの時、それが今ここに完成したことを、イエス様のエッファタの御業から見出していたのです。ですから人々はもう喜びの絶頂に達して、主イエスの御業を言い広め始めたのです。「皆さん、聞いてください。私は見ました。イエスキリストという救世主が現れました。私たちのこの世界に完全な喜びの時が訪れました」などと言って、人々はイエス様のことを触れ回ったことでありましょう。しかし喜びの絶頂というのは、たいがい危険なことでありまして、もう皆さん、お分かりかと思いますが、この人々の喜びというのはぬか喜びでした。この時はまだ喜ぶタイミングではありませんでした。このことを軽く考えることは出来ません。なぜならこの時の人々の熱狂的な喜びが、後日、イエス様が十字架にかけられることの布石になってしまったからです。

　イエス様は全てを見通しておられる方ですから、「人々にだれにもこのことを話してはいけない」と口止めをされました。こう語られるイエス様は実に神妙、厳粛な面持ちをされていたのではないでしょうか。イエス様には人々のこの時の喜びが遅かれ早かれ、嫉妬心や、攻撃性に変化してしまうことを見抜いておられたのだと思います。

　このように、喜び一つをとりましても、喜ぶ時、喜びを抑える時といったタイミングはとても大切です。そして今の私たちに対して言えば、私たちは今の世の中で大いにこのイエス様のエッファタの御業を喜びをもって人々に告げ知らせても良いのです。実にタイミングというのは難しいですね。

でも、そのタイミングは実は、イエス様が聖書の中で私たちに分かりやすく指示しておられることです。マルコ福音書で見ていきますと、冒頭の1章14節でイエス様は「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と人々に言われました。この時イエス様はまだ「福音を信じなさい」と言っておられるだけです。そうして、マルコ福音書の最後16章15節になって初めてイエス様は「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」と言われます。十字架にかけられて復活した後に始めてイエス様は人々に「福音を宣べ伝えなさい。」と言われたのです。そしてそれは今の私たちに継続されているのです。

　このように福音書の中でイエス様と同時代に生きた人々と、今、イエス様と共に生きる私たちとではイエス様から言われていることが違うのです。イエス様の言われることは時にかなって美しくもあり、又、違いもあるのです。そして、そのイエス様の御言葉に注意深く耳をすまして聞いていけば、私たちもそれほどタイミングを外さずに、御心を行って行けるようになるかもしれません。でも、決してイエス様の様に完璧に行っていくことは私たちには出来ないことでしょう。だから、私たちは、いつも、イエス様のなされた時にかなった完璧な御業をほめたたえつつ、イエス様と共に、その御業に預かりながら歩んでいくのであります。

　ここまで語って、イエス様のなさったことの素晴らしさを宣べ伝えたくなる一方で、私たちの行いのタイミングの外しまくりの愚かさを知らされました。しかし、私たちの信仰、ということを考えればどうでしょうか。イエス様は、私たちに最初から最後まで、「私を信じなさい、私の言葉に耳を傾けなさい」と言い続けておられることは間違いがないのです。

ルターが「私たちは、行いではなく信仰によって救われる」と語った意味は、ここらへんにも見出せることでしょう。つまり、私たちは行いによっては必ず罪を犯す者であります。一日に一回は多少ならず罪を犯しているのではないでしょうか。しかし、信仰というのは罪を犯すものではありません。信仰し続けて、信仰をなくさないならば、私たちは罪に陥ってしまうことがないのです。実は、ルター自身は、多くの行いの生涯を送ったがゆえに、その行いの愚かさを思い知らされたのでありましょう。彼は行いに対して、信仰がはるかに優っていることを身をもって気づかされたのであります。

　さて、ルターの話が出ましたので、今日のヤコブの手紙の聖書箇所を見ていきましょう。ルターはこのヤコブの手紙を毛嫌いしていました。最初からこういってしまいますと皆さんに妙な先入観を与えてしまいかねないですが、ルターも一人の人間に過ぎませんから、一つの見解として聞いて頂ければと思います。

　ヤコブの手紙を読んでみますと、何かイエス様の言葉であるというよりは、人間ヤコブの言葉、といった印象を受けます。その分、私たち人間にはとても分かりやすい内容となっています。イエス様の御言葉というのは人間的に分かりやすいということはありません。例えば、今日の、「人々にだれにもこのことを話してはいけない」という御言葉も説明されなければ、その意味が分からないことであります。しかし、ヤコブの手紙に記された言葉はどれをとっても分かりやすいです。そして、ヤコブの手紙は人間の行いについて記しているがゆえに、読者の受け止め方は、千差万別になるでしょう。ルターはこれを毛嫌いしましたが、私などは、大変励ましになるので、自分の行いの参考にするためによく読んでいます。いわば、不完全な人間が、不完全な自分たちの行いについて、出来る限り御心を語っているので、そこに価値があるのだと思います。ヤコブの手紙は記します。「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。」この御言葉を聞いて、今のあなたの心にどのように響くでしょうか。イエス様、おっしゃることはごもっともですが、今の私には行う元気がないのです。どうか許してください。」という方も多くおられることでしょう。又、ルターの様に血気盛んな人は「何を言われますか、信仰があればいうまでもないことです」と言われるかもしれません。

　この、ヤコブの手紙はルターに限らず古くから物議を醸してきました。その価値をおとしめる教師が多くいる中で、アウグスティヌスはその価値を認め、皆はそれにならって、この手紙を重んずるようになりました。こういったヤコブの手紙をどう読むか、という私たちの行い一つをとっても、そこには多くの罪があります。時に応じて私たちはタイミングを外しながら罪を犯してしまいます。

ヤコブの手紙に聞いてまいりましょう。「わたしの愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。人の怒りは神の義を実現しないからです。」この御言葉はまったく持って然り、その通りでありますが、ではその通り私たちが行えるかどうかというのは又別の問題があることでしょう。

「みなしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れのない信心です。」このこともまったくそのとおりでありますが、では今の世の中で、ある乳児院に、見知らぬ人が突然押しかけて行って子供のお世話をさせてください、と申し出ても、追い返されてしまうことでしょう。

このように、私たちが私たちの罪多き行いにより頼んで、最後の永遠の時に入れられようとしても、その道行は前途多難であり、生き詰まってしまうことでしょう。ヤコブの手紙は、私たちの行いの不完全さを図らずも教えてくれています。そしてそのことを悟るとき、そこに主イエスのなさったことの全ての素晴らしさが、目の当たりにされることでしょう。

　今日ここに集められた私たち兄弟姉妹、老いも若きも、自らの行いの不完全さを知りつつ、主イエスの素晴らしい御業をほめたたえつつ、最後の永遠の時を目指して、共に歩んでまいりましょう。

祈ります

天の父

主よ、今日の敬老感謝主日礼拝に臨んでくださり、私たちに御言葉を下さることに感謝します。どうか私たちが御言葉をいつまでも信じ、遂に永遠の御国の喜びへ入ることができますよう、私たちの信仰を守ってください。

この場に集えない方々も多くおられます。どうか、時と場所を超えて働かれるあなたの御業によって、私たちを祝福しお守りください。私たちを一つの聖霊で満たし、共に、あなたを礼拝し賛美することができるようにして下さい。

今、コロナ渦にあって、多くの方々が病と戦っておられます。どうかそのお一人お一人をあなたが慰め癒してください。又、そのために従事されています医療従事者の業を強めお導き下さい。

私たちが、御子イエスキリストの御業にならい、臆することなく一人一人に託された業を行っていくことが出来ますように。あなたの御心とお導きを信じます。

父と聖霊と共に